「新たな出会いと変化」
3-B　東京外国語大学　青木南奈

隣国でありながらも実際に訪れるとなると何故か敷居が高く感じてしまう、なんとなくネガティブな印象を抱いてしまう、それが訪中前の中国に対するイメージであった。日本の将来を担う若者の１人として訪中団を通じて自分の目で中国という国を知り、自分の口から多くの人へと伝えていくことが今回の訪中団の目的の１つであった。訪中を終えて、自分の目で確認して中国を客観視することはもちろんのこと、加えて今回の訪中では期待していなかった「出会いで人は変わる」ということを、身を以て経験できたと考える。新たな出会いにより、私自身が変化したと感じる考え方や心構えについて、3 つの側面から振り返る。

まず、中国という国との新たな出会いにより、「中国の印象」が大きく変化した。実際に現地に赴くことで、中国の歴史や文化、中国の人々の暮らしぶり、現在力を入れている技術革新について理解を深めることができた。とくに、同じ国内でありながらも訪れた３都市が異なる魅力を見せてくれたことに中国の良さを感じている。政治の中心地でありながらも、万里の長城や故宮などがあり、今と昔を同時に感じることができる北京。技術革新の中心地であり多くの企業や工場、研究施設が集まっていながらも、秦の兵馬俑や唐代の建造物など歴史を街全体で感じることができる西安。そして経済の中心地であり、世界を代表する夜景が楽しめる大都市上海。それぞれの都市での滞在時間は決して長くはなかったものの、空港から中心地へと向かうバスの車窓でさえ異なる景色を見せてくれた。国として、都会的なだけではなく歴史的な建物を大事にしていることや、少し中心部を離れると東南アジアのようなローカルな街並みが広がっていることに中国の多様性を感じた。一方で、衛生環境の整いという点に関しては、中心部と郊外で大きな差があると感じた。下水管設備などを含め、衛生面に関しては日本の技術を取り入れることで、中国の人々の生活を豊かにすることができるのではないかと考える。

２つ目の出会いが現地の人との出会いであり、文化の違いや多言語学習へとさらに興味を持つきっかけとなった。とくに印象的だったのは、北京外国語大学と西安外国語大学での学生との交流の時間である。プログラムの詳細が発表された際、ディスカッションが日本語で行われると知り衝撃を覚えた。北京外国語大学では、ディスカッションも交流も全て日本語で滞りなく行われ、交流した学生たちはそれぞれ動機は異なるものの日本語を学ぶことが楽しいと仰っていた。また西安外国語大学でペアだった学生も、日本語はそれほど流暢ではないものの一生懸命日本語と英語でコミュニケーションを取ろうとし、盛大にもてなしてくれた。私は中国語をほとんど話すことができない状態で訪中団に参加したが、相手の国の言葉が話せることで、相手に伝わる思いや話のバリエーションの幅が大きく変わるということを再確認し、中国語習得へのモチベーションが上がった。また、レストランの店員や空港内ショップの店員との会話も英語では成り立たないことも多かったため、中国をさら

に知るためにも中国語を習得することに意義を感じた。

最後の出会いは、今回の訪中団に参加した日本人学生との出会いである。様々なバックグラウンドを持つ日本人学生との出会いは、一週間お互いに仲を深めることによって、自分自身の挑戦意欲の向上に繋がった。多くの国を訪れた経験がある者、異なる言語を学習する者、私が留学したオーストラリアとは別の国へと留学した経験がある者、また楽器やダンスなど自分が熱中できる趣味や特技を持つ者。それぞれの友人が自分とは違った経験をして今回の訪中団に参加していることを話していく中で実感し、今後の自分の人生設計の可能性を見出した。話しているだけでも刺激を受けることができる、そんな一生仲良くしたい仲間に出会えたことも訪中団に参加して得られたことである。

大学４年になり、新たな出会いを探すことに難しさを感じていた中での訪中は、中国を知ることはもちろんのこと、今後の学習意欲と自身の経験や成長をさらに追い求めていくきっかけとなった。すべての出会いに感謝し、今後も中国で感じたことを周りに伝え、日中友好のためにできることはないか模索していきたい。

「初めての中国訪問を終えて」
3-B 日本女子大学 東江萌花

大学生訪中団に参加するにあたり、中国の文化を知ること、実際に中国で暮らす人たちと交流しリアルな中国を体感すること、この 2 点が個人的な目標であった。私は今回が初めての訪中で、実際に自分の目で見る中国は目に映るもの全てが新しく、非常に学びの多い一週間となった。

文化の面では、特に大学で専攻している建築について注目した。万里の長城や兵馬俑といった世界遺産は歴史の教科書で見ていたよりもはるかに壮大で、中国の悠久の歴史を目の当たりにした。日本の建築は中国からの影響も大きいが、やはり実際に見てみると異なる点も多くあるとわかった。一方で眩しすぎるほどライトアップされた上海の高層ビル群は、中国の経済発展を象徴するかのような輝きであった。また、道路沿いにはコピーアンドペーストされたように同じ形をしたマンションが永遠に続き、建設途中のものも多く見られた。中国は土地が国有のため、デベロッパーによる面的な開発が盛んだということは知っていたが、想像以上に数が多く、人口規模や国土面積も日本とは全く異なる中国の大きさを感じた。また、大半の住居では外にバルコニーが設けられておらず、室外機は外壁に取り付けられていたことも印象的であった。今回はそれぞれ政治の中心である北京、歴史の中心である西安、経済の中心である上海の三つの都市を訪問したが、それぞれの街ごとの特色ある街並みはバスの車窓から眺めるだけでもさまざまな気付きをもたらしてくれた。

交流の面では、中国で出会った人たちは日本から来た私たちに本当に良くしてくれ、大変充実した時間を過ごすことができた。日本では中国に対してマイナスな報道をされることも少なくないが、交流した大学生たちをはじめ、ホテルやレストラン、お土産屋さんの店員さんなど、中国語がほとんどできない私にとても優しく接してくれた。中国へ行く前は漠然とした不安があったが、実際に中国の方と接してみて、日本人に対して悪い感情を持っている人ばかりではないということを実感した。しかし今回の訪中と時を同じくし て、蘇州では痛ましい事件も起こった。今回の訪中では良くも悪くも中国のほんの一部の面しか見ることができなかったと思う。日本人にも中国人にもさまざまな考えを持つ人がおり、その中で離れることのできない隣人同士どのように付き合っていけばよいのか、今後も中国について学び、考えていきたい。中国という国はたった一週間の訪問で知るには大きすぎる。次のステップとしてぜひ自分でも中国を訪れてみて、他の都市や、より人々の暮らしに密着した場所を見てみたいと感じた。

また、グループのメンバーをはじめ、全国から集まった日本の大学生と知り合えたことも大きな収穫であった。今回の訪中では、日中、日日どちらもさまざまな人たちとの出会いがあり、一週間という短い期間ではあったがさまざまな話題について意見を交わすことができた。ここでの縁を大切に、また何かの形で関わっていければよいと思う。

「新たな挑戦と発見の旅」
3-B 大阪大学　上野航輔

私が訪中団に応募した理由は三国志が好きだったことと、新しい世界に触れてみたかったからという単純ながらも強い思いであった。小学生の私は、図書館にある横山光輝『三国志』を読みふけり、いつかその舞台である中国の広大なスケールをこの目で見たいと夢見ていた。しかし時が経つにつれてその熱は薄れ、中高大と野球部の活動に没頭していた。そんな中で、野球部の活動だけではなく新しいことに挑戦したいという思いがふとよぎり、そのタイミングで目にしたのがこの訪中団の案内である。軽い気持ちで申し込んだ訪中団であったが、７日間で様々なことを体感し、考えるきっかけとなった。

中国でまず印象的だったのは、その圧倒的なスケールの大きさである。北京首都国際空港に到着すると、広大な敷地と駐機している飛行機の数に圧倒された。飛行機を降りた後も、かなりの距離を歩かなければならず、モノレールのような乗り物に乗る必要があった。最初の一歩から中国のスケールの大きさに面食らったのである。その後も北京市内を巡る中で、巨大な建物群と日本とは比べ物にならない交通量に驚かされ続けた。さらに、兵馬俑や万里の長城を訪れた際には、その圧倒的な規模と歴史の重みに感動せざるを得なかった。兵馬俑を訪れた際、満員電車のように人が押し寄せていたことも、今では懐かしい思い出である。行く先々で目にするものすべての大きさと、人の多さに驚かされるばかりであった。特に印象に残ったのは、クルーズ船から見た上海の夜景である。巨大なビルが立ち並び、壮大で美しい光景は一生忘れることはないだろう。ビル群が夜空に映え、色とりどりの照明が水面に反射するその光景は、言葉では言い表せないほどの美しさであった。

また、中国の壮大な景色に感動するだけでなく、人々の温かさにも心を打たれた。今日の報道や SNS で伝えられる日中関係は必ずしも良好とは言えない。私自身も、正直なところ中国全体に対して良いイメージを持っていなかった。実際に中国に行くと家族や友人に伝えたときも心配された。しかし、そのような不安を抱えつつも訪中団として中国を訪れた際、北京外国語大学や西安外国語大学、中日友好協会、そしてガイドさんたちから非常に温かい歓迎を受けたことがとても嬉しかった。特に、西安外国語大学では、日本人一人に対して中国人学生が一人ずつ付き添ってくださった。彼は、中国の大学にはほぼ必ず学生寮があるという日中の違いを教えてくれたり、お店で中国の大学生に人気のある小豆の飲み物をおごってくれたりと、私に対しておもてなしをしていただいた。最初はお互いに緊張していたが、専攻や出身地、趣味などの会話を重ねるうちに、次第に打ち解けることができた。国は違えど、同じように日々を過ごしている大学生同士としての共通点を見つけ、お互いのことを深く理解することができた。この経験を通じて、中国の方々の温かさと親しみやすさを実感し、自分の中にあった先入観を見直すきっかけとなった。

最後に、改めてこの訪中団に参加して本当に良かったと心から思う。中国に対する理解を深めることができたのはもちろんのこと、自分の固定観念にとらわれず、自分の目で実際に

見て体験しようとしたこの経験は、今後の人生において必ず大きな役割を果たすだろう。訪中団での素晴らしい出会いに感謝し、この貴重な体験を胸に今後も成長し続けていきたいと思う。

「自分で体験すること・自ら歩み寄ること」
3-B　神戸大学　光崎日菜

私はこの訪中を通じて、特に 2 つの重要な学びを得ることができた。1 つ目は自分で体験することの重要性だ。訪中前の私の中国に対するイメージは、主に日本のメディアや SNS の情報を通して形成されたものであった。そのため、急激な経済成長を遂げた国という良いイメージもあれば、環境問題や厳しい就職環境などマイナスのイメージも多かった。しかし、実際に北京・西安・上海を 7 日間見学する中で、このイメージを大きく覆すような景色を何度も目にし、話を何度も聞いた。そして、メディアや SNS の情報を鵜呑みにせず、自ら体験することでそれを確かめる重要性を学んだ。

例えば、大気汚染について日本で見る映像よりも深刻なものではなかった。確かに、綺麗とは言えないが、マスクを着用せずとも過ごせる程度のものであった。また、地球温暖化対策について、中国は世界最大の二酸化炭素排出国であり、環境対策に力を入れていないという先入観を持っていた。しかし、現地の方のお話を聞いて中国の車における二酸化炭素排出抑制のための制度は日本よりも進んでいると感じた。具体的には、上海では従来のガソリン自動車を購入した場合ナンバープレートの購入に 200 万の費用を要するが、電気自動車を購入した場合ナンバープレートの購入に費用を要さないのだ。日本においても電気自動車を購入した場合、補助金や税制優遇が行われているが、200 万ものインセンティブを与えて国として電気自動車の使用を推し進める中国の施策は圧倒的なものだと感じた。実際に、北京や上海の道を走る車の半数以上は電気自動車であった。経済や食生活など、実際に目で見ることで、食べることでイメージが変わった経験は他にも沢山ある。

このように実際に自分の五官を使ってリアルな状況を知ることで、イメージが次々に更新されていく体験を通し、自分でリアルを体験する重要性を感じた。勿論、メディアで放送されていている内容やＳＮＳの情報も大切であるが、それだけを鵜呑みにせず、実際に自分で体験することでイメージを確立していきたい。体験が難しいときは少なくともそれが一面的な情報であることを心にとめて、それらの情報と向き合っていきたい。

訪中を通して学んだことの 2 つ目は自ら歩み寄ることの重要性だ。恥ずかしながら、私は訪中前まで中国の現代文化をほとんど知らなかった。中国のアニメ・ドラマ・映画どれも全く目にしたことがなかった。しかし、現地の大学生は「君の名は」や「米津玄師」など日本の文化をよく知っていた。そして、彼らの日本に対する友好的な姿勢に触れ、私は彼らに友好的な姿勢であろうと思った。この経験を通して、相手との関係構築のために自ら相手を知りそれを伝える重要性を感じた。

振り返ると、これまで私は相手との関係構築や交渉において、自分の意見を一方的に押し付けてしまうことが多かった。しかし、今回の訪中において北京外国語大学・上海外国語大学の学生やバスガイドの方々が日本語でコミュニケーションを図り、日本への興味を語ってくださる姿勢を見て、私も彼らとの交流を深めたいと心から感じた。また、中国の学生と

の交流において私が中国語を用いて自己紹介を行ったときや中国料理について語るとき、相手の学生のテンションが少し上がっていることに気づいた。この経験から、私は相手との関係構築のためには、まず自分が相手に対する興味を示し歩み寄ることが大切だと感じた。歴史に関する問題や主権に関する問題などを抱えており、日中関係は決して良いと言える状態にはない。しかし、今回学んだ相手のリアルな状況を体験すること、相手に自ら歩み寄ることの 2 つを実践することで少しずつ日中の友好関係を築くことができるよう努力していきたい。

「日中大学生との交流から広がる日中友好関係」
3-B　青山学院大学　木幡華子

訪中前の私は、中国について文化的な面で尊重しながらも、お互いに不信感や嫌悪感を抱いていると感じていた。しかしこの想いには明確な根拠がなく、日常の中で溢れる様々な情報によって形成されているものであった。そこで私は、中国を正しく知ることを目的とし、訪中を通して自分の目で見て感じることで学びを得たいと考えていた。

私はこの７日間で大学生交流が最も印象に残った。ここでいう「大学生」は二種類あり、一つ目は現地の大学交流で出会った中国の大学生、二つ目は７日間共に過ごした訪中メンバーである。

中国人大学生との交流について、私たちは北京外国語大学と西安外国語大学を訪れた。北京外大での交流では、中国人大学生の日本語能力の高さや日本への関心の高さに驚いた。交流した中国人大学生にどれくらい日本語を習っているのか尋ねると、５年ほど勉強していると話していた。たった５年で習得が難しいとされる日本語を流暢に話している姿を見て、日本語や日本の文化・社会に興味を持ってくれていることを感じ、とても嬉しく思った。また、西安外大では一対一で交流をした。私を案内してくれたペアの子はりたんさんであり、私が通う青山学院大学について調べ、駅伝を見てこの人がかっこよかったというお話をしてくれた。中国のお菓子やブレスレットを準備してくれて、とても歓迎されていることが伝わって嬉しくなった。りたんさんが私にとって初めての中国の友達である。We Chat を通じて日本に帰ってきてからも連絡をとっており、いつか日本に来た時には最大限のおもてなしをしたいと考えている。日本人と中国人という異なる枠組みではなく、大学生という同じ枠組みとして考えた時、そこでは友達になる上で障壁はなく、相手をもっと知りたい、交流したいという想いがあれば、皆友達になれることを身をもって経験した。

７日間共に過ごした日本人メンバーとの交流も私にとって大切な思い出となった。特に、３B 班は皆が優しい心の持ち主で、さまざまなことに興味関心を持つメンバーだった。そんな 14 人のメンバーとの時間の中で、私は特にパフォーマンスに関する時間が印象に残っている。私はパフォーマンス係のダンスリーダーとして、振り付けや構成を考えた。訪中期間も毎晩のように集まって練習していた。ダンスチームのメンバーは皆ダンス初心者であったため、正直初めは私の中で不安が大きかった。しかし、私が教えたことをしっかりと吸収して一生懸命練習してくれたり、移動時間に動画を見て覚えてくれたりと、メンバーの積極的な様子を見ていく中で不安は消えていった。他の班のパフォーマンスと比べて明らかに難易度の高いことを行おうとしている中で、歌チームを含め、全員が一生懸命頑張ってくれたおかげで、西安外大での発表は大成功だったと感じる。改めて、班のメンバーが能動的にパフォーマンスに参加してくれたことに感謝したい。そして班で過ごす時間を、パフォーマンスを、心から楽しんでくれたことをとても嬉しく思う。日本では住む場所も通う大学もバラバラな 15 人が、日中友好大学生訪中団を通して一つの時間を共有することができ

た。３Ｂと過ごした７日間は、私にとってとても大切な時間となった。

訪中を通してリアルな中国に触れたことで、中国への関心がとても高まった。特に、中国の大学生との交流で日本について学んでくれていることを知って、私も中国語や中国の歴史をもっと学びたいと思った。また、皆が頭で考えているよりも「友達になること」は簡単で、誰もが国籍に関係なく一人の人間として人と友好な関係を築くことはできるのだと気づいた。私たちは日々大量の情報が溢れる中で生きているが、自分自身が経験して感じたことが何よりも信用に値することであると訪中を通して感じた。私一人の力で大きな変化をもたらすことは難しいかもしれないが、今回できた中国人の友と交流を続け、少しずつでも日中の友好関係を築いていきたいと考える。

今回ご尽力いただいたすべての皆様に感謝申し上げます。

「相手を知るということ」
3-B　お茶の水女子大学　塩満理恵

今回の大学生訪中団の 7 日間の中国滞在では、北京、西安、上海の 3 都市を訪問した。北京では北京外国語大学で日本語を学ぶ学生との交流、万里の長城の見学などを行った。西安では西安外国語大学での学生との交流、兵馬俑の見学、ハイテク企業の視察などを 行なった。上海では飛行機の到着時間が大幅に遅れるトラブルにも見舞われたが、大規模な歓送会を執り行い、クルーズ船から上海の夜景を楽しむことができた。

充実したプログラムの中で特に印象に残っているのが、北京外国語大学と西安外国語大学での学生との交流である。それぞれの大学を見学した際には、日本人学生 1 人と日本語を学ぶ中国人学生 1 人がペアとなる編成で、一緒にパフォーマンスを観覧したりキャンパスを散策したりする機会に恵まれた。北京外国語大学でペアになった学生は、アニメや漫画を通じて親しみのあった日本文化にもっと触れたかったという理由で、中学生の頃から日本語を学んできたといい、いつか日本を訪問するのが夢だと話してくれた。西安外国語大学でペアになった学生は、日本語を学び始めて 2 年目の学部生だったが、発言の節々から日本に対して強い関心を寄せていることが感じ取れた。日本語を専攻として選んだ動機を尋ねた際にも、隣国である日本に抱く親近感や、日本に寄せる期待が伝わってくるような回答が得られた。そのペアの学生から聞いて知ったことなのだが、私たちが西安外国語大学を訪問した日は、ちょうど期末試験が目前に迫っていた時期だったという。そのような忙しい時期であったにもかかわらず、授業を公欠して自らの勉強時間を割いてまで私たち日本人学生をおもてなししてくれた中国人学生の心意気に胸が温かくなった。それと同時に、私たち日本人学生は中国のことをどれだけ知っているのだろうか、そしてどれだけ中国の文化や社会に関心を寄せてきただろうかと考えさせられた。また、どれだけ中立な立場に立とうとしていると自分では思っていたとしても、私たちは多かれ少なかれ自らが属する集団に対して肯定的なイメージを持とうとするし、日常的に接する報道や教育の内容もその集団を肯定するものである傾向があることにも気が付くことができた。私は 自分自身は日本という国をニュートラルな立場から捉えることができている」と自負していたが、実際に中国の学生と対話していく中で、自分が日本という国に対して持っているイメージ、日本の役割や特質について持つ意識などが、いかに偏ったものであるかを強く感じさせられた。今回訪問した中国に限らず、自分とは異なるバックグラウンドを持つと接する時には、その人がどのような集団に属してどのようなものに対して肯定的な意識を持っているのかを考慮した上で、相手を尊重するようなコミュニケーションができれば理想的だと考えた。
訪中団として中国を訪問する機会を与えられた私たち日本人学生が果たすべき義務は、

中国での体験や感じたことを自分の言葉で伝えていくことだと思う。コロナ禍を経て、日本から中国を訪問するハードルが高くなってしまったこともあり、隣国であるのに中国を

訪問したことがない、もしくは中国についてよく知らないという日本人は多いはずだ。そのような人にも中国で私たちが見聞きしたものを伝え、民間レベルから日中友好に協力していく意識を持つことが大切だと感じさせられた研修旅行だった。

「訪中を終えて考えたこと」～自身の考え方を変えた契機となった訪中～
3-B 慶應義塾大学　土本麻矢

訪中前には、メディアや本、教科書などを通して中国や中国人についての情報を得ていましたが、実際にその場に行ったことがないことから、どこか一面的なイメージを抱いていました。特にメディアにおいては、日中間の政治的な問題が多く取り上げられることから、相互に深く関係している一方で、自分の実生活に直接的な影響はないと決めつけ、両国の関係性を俯瞰していたと自覚しています。しかし、一週間に及ぶ訪中団での経験を通して、私の中国に対する考え方が大きく変わりました。以下では、中国という国に対するイメージの変化、中国人との交流を通して感じたこと、今後自分はどのように中国、あるいは中国人と付き合っていくべきか、訪中が人生に与えた影響の 4 点について述べます。

まず、中国という国に対するイメージについて、北京、西安、上海という異なる大都市を訪れたことで、中国の多様性と豊かさを実感しました。万里の長城に代表されるように北京の歴史的な遺産や現代的な都市計画、古代シルクロードの中心である西安の文化遺産、そして国際的な金融都市としての地位を確立している上海の活気と繁栄は、中国の中に異なる顔があることを実感させてくれました。私の中にあった「一つの中国」という固定観念が解消され、中国がいかに多面的で複雑な都市の集まりであるかを理解することができたと考えます。

また、中国の現地の人との交流を通して、直接彼らの考え方や価値観に触れることができました。特に北京外国語大学と西安外国語大学での大学生同士の交流の場では、中国の大学生が自分のキャリアや将来の生活など、未来を見据えて勉強に励んでいることを知りました。日本では、やりたいことや未来への展望がない学生や、就職活動においても世間体を気にしてしまう学生が多いですが、中国の学生は自分のやりたいことを明確にし、遠い将来についてもプランを持っている学生が多いことを実際に耳にしたことで、学ぶことが多い交流となりました。人口が多い中国には、日本以上にさまざまな考えの人がいると思いますが、多くの学生との交流を通して感じた彼らの将来に対する強い意志が、個人レベルにとどまらず、街、ひいては国の発展にもつながっていると感じました。

次に、今後自分はどのように中国、あるいは中国人と付き合っていくべきかという点について述べます。今回の訪中を通して感じたことの一つに、日中両国の関係をより良くするには相互理解と直接的な対話が必要だということを挙げます。隣国であるからこそ歴史的にも政治的、経済的にも衝突が避けられないことが多々ありましたが、それらの問題だけに目を向け敵対視するのではなく、今後の両国の関係を良好なものにするための改善策を話し合う必要があると思いました。それを実現するにあたって、まずは互いに関心を持つこと、そしてその上で直接話をすることが重要だと感じました。現地の大学生との交流会では、互いに相手の国や文化について関心があったからこそ話が弾んだと考えます。また、メディアでみる中国や中国人との印象と実際に話してみての印象は全く異なる為、今後も今回の訪

中団のような文化、教育、経済などさまざまな分野における人的交流の機会を増やすことで両国それぞれが相手に対してより一層の関心を持ち、友好な関係を築くことができるようになると思いました。

最後に、今回の訪中団は私の人生にとって重要な経験となりました。机上での勉強ではなく実際に自分の目で見て、足を運んで、人と交流することで「生」の中国を感じることができたとともに、これまでの固定観念を解消し視野を広げることができました。中国に対する関心や理解を深められただけでなく、中国の学生が自国の発展に対して誇りを持ち、自身の、あるいは自国の未来に向けて積極的に取り組んでいる姿を見て、自身も日本の社会や国際社会に貢献できるように努力したいと強く感じる契機となりました。また、彼らとの対話と通して、まずは自分の意見をしっかりと持つこと、そしてそれを他者に分かりやすく伝えることの重要性を再認識しました。今回の訪中を通して得た知識や経験を、今後のキャリアや人生設計に大いに役に立て、今後も国際的な視点や多様な文化を受け入れる心を養いたいと思います。

訪中で抱いた「わからない」という感覚
3-B 京都大学　日坂真央

私が今回の訪中団に参加した目的は、「自分の目で見て実際の中国を知る」ことだった。大学に入るまで、私は中国に対してあまり良い印象を持っていなかった。しかし、大学で中国語や中国文化について学んだことで、本当は中国について無知だっただけだと気づいた。今の中国についてもっと知りたい、自分の目で確かめてから中国に対するイメージを作りなおしたいと感じていた時に見つけたのが、この訪中団の募集だった。ところが今回私が一番強く抱いたのは、「わからない」という感覚だった。

まず感じたのは、中国に対する「わからない」である。もちろん、中国の街の様子や食文化など、実際に目で見て体験して得られたことはたくさんあった。しかし悠久の歴史、広大な国土をもつ中国について学ぶのに一週間という期間はあまりにも短かった。そのうえ、恥ずかしながら私は中国の歴史や政治経済についてほとんど知らず、それゆえ理解できないことも多かった。ただ訪中を終えてなお残るこの「わからなさ」は、私が今後中国や中国語について学ぶ大きな原動力となると思う。実際に中国を訪れたからこそ得られたこの切実な「わからなさ」を糧に、これから中国語や中国史、中国の地理などをしっかり学んでいきたい。

また三つの都市をめぐったことで、中国は「中国」とひとくくりにできないほど多様な文化を持つということも実感した。現地で出会った方々もそれぞれ個性豊かで、そもそも「中国に対するイメージ」と一括りにすることが困難であると感じた。

もう一つ感じたのが、中国の文化に対する「わからなさ」である。円卓を囲んでの食事では毎回絶対に食べきれない量の食事を提供していただき、「まだ運ばれてくるの！？」と若干の恐怖さえ感じた。中国ではふるまわれた料理を残すのがマナーと聞いていたが、想像以上だった。また、レストランのキッチンから怒声が聞こえてきた時、同じテーブルにいた西安外国語大学の学生さんから「あれは言い合いではなく相談ですよ」とさらっと説明され、一同驚愕したこともあった。バスの車窓からも、荷台にこんもりとスイカを乗せた中型トラック(しかも路地に駐車してそのまま売られていたりする)、鳴り響くクラクション、早朝にショッピングモールの店先で輪になって踊るご婦人方など、日本にはない光景が多く見られた。あまりよくない言い方であることは承知の上で言うと、これらのことは今まで日本から出たことがなかった私にとってはわけがわからない光景だった。

ではこの「わからない」を「わかる」に変えることが日中友好につながるかというと、私はそうではないと思う。私自身の無知については一度置いておいて、感覚としての「わからなさ」は言い換えるならば文化の差異ではないだろうか。国が違うのだから文化の差異はあって当たり前だし、その差異を乗り越えて無理やり「わかろう」とする必要はない。そもそもできない。あのレストランで見た怒鳴り合いが相談だったとしても、同じ熱量で相談されたら私は間違いなく怖くて逃げだす。文化の差異があることを前提として、利害を調整しな

がら「わからなさ」をおもしろいと思うくらいの姿勢がいいのかもしれない。

日本が中国とどのように付き合うべきかについて、孔子の『君子和而不同』という言葉を挙げたい。これは、君子は人とは仲良くするがむやみに同調しない、という意味だ。私はこの言葉に隣人中国と付き合ううえで重要な考え方が表れているように思う。

最後になりましたが、飛行機に乗ることすら初めてで右往左往していた私を何度も助けてくれた 3-B 班の方々、90 名あまりの学生を引率してくださった友好協会の方々、このような機会を与えてくださったすべての方々に感謝を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

「中国から見た世界に触れる」
3-B　東北大学　福田蒼龍

ニュースや歴史で目にすることの多い中国。一方ニュースで見ることは本当なのか、それに対する市民の考えはどのようなものであるのかということに大きな疑問があった。そんな中国について少しでも知りたいという思いで今回の訪中に参加したが、今私は中国についてさらに多くのことを知りたいという思いでいっぱいである。この 7 日間で得た経験は私が中国について一層興味を持つきっかけとなった。そして私自身の今後の課題も見つけることができた。今回は特に記憶に残っている中国のマスメディアとそれを通して考えたこと中心に書く。

7 日間では多くの場所を訪れ、万里の長城や兵馬俑などの憧れていた歴史的名所を訪れたり、圧巻の上海の夜景を見るなどして感銘を受けたり、料理や人々との交流を楽しんだりなどと多くの貴重な経験を得た。そのどれもがかけがえのないものであり、それぞれが多くのことを感じさせられるものであった。しかしながら訪中団の正規の活動ではないものの、ホテルで何気なく見た中国のテレビ番組がとても興味深く、一番中国についてじっくりと考えさせられるもであった。まず興味深かったことは中国のドラマでは中国のみならず、日本語や朝鮮語の内容のドラマが放送されていることに驚いた。日本のテレビドラマでは日本語以外のシーンはあまり見かけない。残念ながら詳しい内容を理解することはできなかったが、朝鮮語のドラマについては調べたとこ朝鮮戦争において中国が北朝鮮を支援したことを記念するものらしかった。

ドラマ以外のテレビ番組だと核兵器についてのものを見つけた。主にアメリカとロシアについての話であり、ウクライナでの戦争を示しつつ、アメリカの核が不安を与えているという内容のようであった。日本ではなかなか見ることのできない内容であり、アメリカとの対立を深める中国の視点を垣間見ることができた。さらに重要なことは、中国自身の核の配備状況については一切触れられていなかったことである。核保有数のランキングが映されていたが、1 位のアメリカ、2 位ロシアまでしか見ることができず、3 位以下はモザイクがかかっていた。日本では中国の軍備拡大が各種メディアで報道され、私自身脅威に感じることがあったため、中国国内でのこのような報道は驚きであった。これを見た中国の人々が軍備を拡大するのは必要なことであり、原因はアメリカにあると考えることは十分にあり得るだろうし、番組の制作意図も同様だと考えられる。

中国のテレビ放送を通してメディアというものがその国の立場を反映していることを実感できた。普段日本で生活しているうちにはあまり感じることはなかったが、日本のメディアでも同じように行われているのだろう。私はより一層自身で直接物事を見る必要があり、

特に国同士の関係を客観的にとらえる上では両方でどのような情報の伝えられ方をされているのかを知ることが必要だと考える。とはいえ、多くの人々は自分の国内の限られた情報にしか接することができないし、それによって意見を形作るほかないだろう。両国民の共通の考えを見つけ出すには、互いがおかれた状況を知る機会を多くの人々が持つ必要があると考える。具体的にどのような解決策があるのかを今の私では見つけられていない。これは今後の課題としてまずは私自身が中国を知ることで解決策を見つけていきたいと考えている。

その一方で、言語学習の重要性も強く感じることとなった。今の私では番組の内容の細部を知ることはできず、とても歯がゆい思いをした。中国で過ごすと日本とは比べられないほどに中国について学べるチャンスがあるが、それを十分に活用するには中国語を身に着ける必要がある。現地大学生との交流ではとても日本語が流暢であり、難なく意見交換ができたが、今後より中国について理解を深めるには日本語が話せない人も含めあらゆる中国人と交流をしていく必要があると考えている。中国で出会ったガイドさんや学生のように相手の言語でやりとりができるように言語学習を今まで以上に重視したい。

最後に準備や 7 日間の日程では多くの心尽くしをいただき、非常に感激した。いただいた思いを今度は私が次の人々へ届けられるようにしたい。そのためにもこの訪中団の経験をきっかけとして中国の考えを学んでいきたい。今後も長く続く日本と中国の関係をこれから担っていく者として今回得た経験、特に人との繋がりは今後も大切にしたい。そして再び中国を訪れられる日を楽しみにしている。

「真の中国を見つめる」
3-B 筑波大学 星川七海

6泊7日の訪中団全日程が終了した。万里の長城に兵馬俑、中国の優秀な大学生との交流など、文字通り息つく間も無く中国の魅力を体感した7日間であったと感じている。この旅を通じて、私の中で大きく変わった部分と、反対にあまり変わらなかった部分がある。

まず一番に変わったと感じる部分は、やはり中国に対する印象である。実際に中国に行く前の印象は、母がなぜか中国を毛嫌いしている影響もあり、どちらかといえばマイナスだった。ただ日本や他の国で中国から来た留学生と交流する中で彼女らの勤勉さや優しさに触れて、本当の中国、本当の中国人の姿をこの目で見たいと思い訪中団に応募したのである。実際に中国を訪れて感じたのは「中国の人めっちゃ優しい」これに尽きる。私たちの旅を近くでサポートしてくれた中日友好協会やツアーガイドの方々はもちろん、レストランや観光地のスタッフの方々、交流先の大学生の皆さんなど、中国で出会ったすべての人が中国語が分からない私にも笑顔で暖かく接してくださった。また私が最後に空港で体調を崩してしまった際も、救護室の先生はもちろん空港のスタッフの方もすごく親切に助けてくれたことが印象的に残っている。私たちはプログラムで訪れていて特別に厚いおもてなしを受けたことを考慮しても、今回中国で出会えた皆さんの日本への愛やホスピタリティは本物だと思う。中国人は怖い、がめついといったようなマイナスな印象はこの旅程を通じて180°覆された。

一方であまり変わらなかった部分は、実際にその場所に訪れて確かめることを重んじる考え方である。私は普段から考えるよりも行動、何事もまずやってみる、行ってみるをモットーに生活している。最近はzoomやVRなど、その場に行かなくてもバーチャル空間上で完結するようなツールが増えてきて便利になっているが、今回の訪中を経て改めて生の交流の重要さを再認識した。特に北京と西安で行われた現地外大生との交流では、住む国は違えど同じ大学生として、就職・将来のことから普段の暮らしのことまで日中の大学生で共感できる部分が大きかったように思う。これは意外に感じたし、オンラインで行われる形式的なディスカッションではあまり生まれない気付きではないだろうか。隣同士で座ってなんでもない雑談の中から生まれる発見こそ交流の真の成果だ、と私の現場主義はさらに強固なものになった。

最後に、今回の訪中で印象に残った言葉がある。それは西安外大で学生代表王さんのスピーチにあった「少年强则国强，少年智则国智」(若者が強ければ国が強くなる、若者が賢ければ国が賢くなる)という言葉である。私たち大学生はこれから一番若い社会人として、守り育てられる存在から、誰かを支え育てる存在へと変わっていく段階にある。私も社会をつくる若者の一人として、自らを高め、日本を強く賢い国にしていきたい。そして、今回ご縁があって訪問できた中国とも良き隣人として関係を維持していけるような土壌を築いていきたいと思う。

追伸

川津団長、前田さんはじめ随行スタッフの皆さま、大変お世話になりました。最後に体調を崩してご迷惑をお掛けしてしまい申し訳ありませんでした。すぐに回復して当日の夜から元気ですのでどうぞご心配なく！皆さまのサポートのおかげで大変貴重な経験を得ることができました、本当にありがとうございました。

「私から見た中国」
3-B　東北大学　松野嵩生

「大きくてはやい」これが訪中を終えた今、中国という国の印象です。

中国に到着してまず私を圧倒したのは高層ビルが立ち並ぶ都市の景観でした。北京や上海のような大都市では、空を突き抜けるようなビルが無数に立ち並び、そのスケールの大きさには驚きを禁じ得ませんでした。日本の都市も高層ビルが多いとはいえ、ここまでの規模で一斉にそびえ立つ光景は見たことがなく、まるで未来都市に迷い込んだかのような感覚でした。

しかし、その一方で、路上で寝転んでいる人々も目にしました。都市の華やかさの裏側には、貧富の差という現実が確かに存在しているのだと実感しました。世界一の企業の本社のすぐそばに、貧しい生活を強いられている人々がいる。このコントラストは私に深い印象を残しました。中国の急速な経済発展の影には、まだ解決されていない多くの社会問題があるのだと感じました。

また、中国では最新のテクノロジーが日常生活に浸透していることにも感銘を受けました。

例えば、顔認証システムの積極的な利用が挙げられます。自動販売機等で顔を認証するだけで支払えるサービスや、空港内で顔を認証することで利用する飛行機の出発時刻や搭乗口を示すサービスがありました。

これらのサービスは日本でも技術的には可能だと思いますが、導入するまでに様々な問題をクリアする必要があり時間を要するのだと思います。中国という国の実行の速さを示す一例として印象的だったのが西安外国語大学での出来事です。学生同士の交流が終わった直後にその振り返りのビデオが流されたのです。そのスピードは驚異的であり、その効率の良さと迅速な対応には感銘を受けました。こうした素早い対応力が近年の中国の急速な発達を支えている一つなのだと感じました。

このような外面的な部分に加え、内面的な部分として滞在中に出会った中国の人々の温かさも印象的でした。初めは無愛想に見えた店員さんも、私が困っている時には親身になって助けてくれました。例えば、言葉の壁に苦しんでいた時、一生懸命に翻訳アプリを使ってコミュニケーションを取ろうとしてくれたり、電子決済が使えなくなってしまった時、一緒に対応策を考えたりしてくれました。訪中前の店員さんの無愛想なイメージは決して間違っていなかった一方で、必要最低限のサービスを提供しつつ困ったことがあれば優しく対応してくれる中国の接客態度は非常に合理的であり日本のそれと比較して優劣を決めるものではないと感じました。

日本にいると中国や中国人に対する情報が何らかのメディアを介在して伝わることがほとんどであるため、一部誤った理解をしてしまうこともあります。今回のプログラムに参加し、自分の中の中国に対する価値観をアップデートすることができました。本来歴史的な結

びつきが強い日中両国の子々孫々の友好に寄与するよう励みます。

　最後になりますが、この訪中団に関わっていただいた皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

「小さな一歩をいつか大きな変化に」
3-B　上智大学　三部恵理香

「つまるところ、大切なのは愛と好奇心を持ち続けることなのかもしれない。」日中友好大学生訪中団の一員として、一週間の中国訪問を終えた今、私の中で導き出された感想はこれだった。日本に帰国する飛行機の中で、今後の日中友好のために自分は何ができるのだろうかと考えていた。訪中団応募のきっかけを振り返りながら、現地での経験や出会いを通して感じたことを整理したことで、自分の中で生まれた変化と、その変化を周囲にも波及させていくためにすべきことが見えてきた。

訪中団応募のきっかけは、コロナ禍を経て大きく変化した世界の中で、中国がどのような変化を遂げたのかを自分の目で確かめたいと思ったからだ。もともと私は、日本の大学生の中でも中国との関わりが強い方だと思う。大学の研究では、専攻分野における日本と中国の比較を行っている。個人的な付き合いにおいても、海外留学先で出会った中国人の友人のみならず在日中国人の友人も多くいて、日々盛んに交流している。加えて過去には旅行で中国の複数都市を訪れたことがあり、実情についてはそれなりに理解しているつもりだった。しかしコロナ禍を経て、状況が一変した。日本から中国について知る最大の手段である報道だけでは、これまで興味関心を持って接していた中国の「今」を理解することができないと思い、現地大学生との交流や企業訪問などができる訪中団に応募した。

コロナ後初めて中国を訪れてみて、何千年もの歴史を持ちながらも、生活空間における技術の進歩に貪欲な姿を実感した。例えば、以前訪れた時より高層ビルの数が増加しているように感じたし、キャッシュレス決済の普及率の高さやロボットが日常的に見られる光景には驚いた。また今回の訪問で滞在した、政治の中心・北京、歴史を誇る・西安、経済の中心・上海の三都市それぞれが持つ全く異なる表情を一気に体験できたことも、中国という広大な土地を持つ国を理解するのに役立った。

このように 1 週間の中国訪問で様々な発見や出会いがあったが、その中でも特に印象に残っているのは、日本に興味を持ち、日本語を学んでいる中国の大学生との交流だ。訪問先である北京外国語大学と西安外国語大学では、プレゼントやおもてなしを通して、私たちの訪問を心待ちにしてくれたことを実感した。また、短い時間ながら現地学生と多くの話題について話ができたことで、異国の地で友人ができたことが嬉しかった。私が主に話をしていた学生は誰一人として日本を訪れたことがなかったが、日本アニメや日本文化などへの興味関心が強かったことで、日本語を学ぼうと決意したのだと教えてくれた。さらに詳しく話を聞いてみると、世界中で知名度を誇る日本アニメ以外にも、日本のドラマやバラエティ番組など、別ジャンルでも多くの番組を中国国内で視聴できるのだと言う。テレビ番組内で描かれる日本人の姿や生活の様子を身近に感じているが故に、日本に対する強い関心が生まれたのだろう。それと同時に、日本でも同じように中国を身近に感じられるコンテンツの普及はしているのだろうかと疑問に思った。振り返ってみると、日本では配信などで中国ドラ

マなどを楽しむことはできるが、配信コンテンツの普及以上に、メディアによる一面的な報道によって生まれる中国像が蔓延しているのだろう。中国に全く接点がない友人と話していると、報道されている姿が中国の全てであると認識しているように感じる瞬間が多々あった。

中国との関わりは多くの産業や分野に及び、関係を避けては通れないにも関わらず、日本ではまだまだ隣国に対する関心が薄いのが現状だ。しかしそんな状況でも、私は訪中団の一員として現地を訪れ、自分の目で「中国の今」を見る貴重な機会をいただけた。そんな私だからこそできることは、私自身が以前から持っていた「中国への関心」と、訪中を通して出会った人たちへの「愛」を忘れずにいることなのではないか。その上で、「私の目」というフィルターを通して見た景色、感じたことを周囲に伝え続けたい。行動としては小さいかもしれないが、自分の中で生まれた変化を内に留めておくのではなく、身近な人から広げていくことで、いつか大きな変化を生み出したい。中国への飽くなき好奇心と愛が、日中友好の架け橋に繋がる一歩になることを願って。

「一般民衆から見る中国発展の意味」
3-B　横浜国立大学 望月琴絵

私が日中友好訪中団に参加した動機は、急速に発展していく中国の姿を直接自分の目で見ること、そして、中国に暮らす人々との交流を通して、中国人の暮らしや一般的な感覚を知りたいということであった。この動機がどの程度達成されたかについて述べる。
まず、観光地やホテル、空港等で働く方々の態度や、整備された街並み、ガイドの方の熱心な姿勢などを見て、中国は世界からどう見られているかを非常に気にしていると感じた。中国に対し「危険だ」「中国人は主張が強い」という印象を持つ人もいるが、中国は決してそう思われることを望んでいないと思う。少なくとも「怖い」というイメージは中国に対する偏見であり、中国は無闇にイメージを悪化させるような行動を取らないという印象を受けた。

上記のように「危険だ」という偏見を持たれている節があることに加え、中国政府は特色ある社会主義を採用しており、情報統制も強い。そのため、中国政府は独裁で、裏で何をしているかわからないといったイメージがある。さらに中国の経済成長のポテンシャルは非常に大きく、それも脅威に感じられる。しかしその一方で、一般民衆のレベルでは非常に純粋で善良な人々でもあると感じた。

西安外国語大学では大変な歓待を受け、この交流を待ち望んでいたことが伝わった。北京の学生の日本語力の高さには驚いたが、北京が特別であるというのは中国人にとっての共通認識のようである。どちらの外国語大学も日本語の発音は大変上手く、日本の語学教育とは全く違う教育方法が採用されていそうだと感じた。印象的だったのは、西安外国語大学の学生に中国の技術開発に関して質問をしたところ、実は一般民衆はあまりよく知らないという答えが返ってきたことである。中国でどのような技術が開発されているのか、実のところ一般民衆はよくわかっていないが、政府の活動により自分たちの生活は豊かになっており、国はきちんとその発展を民衆に還元していると話していた。この話を聞いて、私の中国政府に対する印象は確実に変わったと思う。

中国の地域格差に関する情報をよく目にするが、実際に北京の市街と西安の郊外では、街並みを見るだけでも発展度合いの差を感じ取れた。中国に大きな格差があるのは事実ではあるものの、中国の広さと人口の多さを考えれば、致し方ない部分でもあると思う。西安外国語大学の学生の話を聞き、中国政府が他国に対してどのような体制を取っているにせよ、国民の生活レベルを向上させていることもゆるぎない事実であるのだとわかった。

また、中国で一番驚いたことは、英語が全く通じないということである。中国の宇宙開発について質問した際、中国製の国際宇宙ステーションのマニュアルは中国語であるという話があり、これは非常に衝撃的だった。国際的な場面で使われる言語は英語だと思っていたが、中国の認識はそうではない。英語を使わなければならない場面では、英語ネイティブに

絶対的な優位性があるが、中国はあくまで中国語を使う。これは、中国が自国のアイデンティティを強く持ち、他国に依存せず自立した発展を目指している証だと感じた。

中国は計画的に世界の覇権を狙う大国であり、一方で民衆のレベルではただ幸せな生活を願う善良な人々の国である。開発特区の広さや凄まじい規模の団地、北京や上海の美しく近代的な街並みを見ると、中国の進歩は一つの脅威であると感じる。日本人が隣国である中国の急速な発展に危機感を抱くのは当然だが、どのような思惑があるにせよ、中国政府が大勢の善良な国民に豊かな生活を還元していることは事実である。中国に住む人から直接、政府の活動によって生活が改善されたという話を聞くと、国と国の技術競争や中国の世界での立ち位置といった話よりも大切なことがあるのではないかと思わされた。中国人も私たちと同じように毎日を生きる人々である。日本と中国という国の枠を超えて、お互いの生活がより豊かになるように共に発展していける世の中になれば良いと思う。

今回の訪中を通じて、中国に対する見方が変わり、中国の発展をただ脅威として見るだけでなく、一般民衆の視点からも理解することの重要性を感じた。この交流が日中友好の一助となり、両国の未来に向けた協力が深まることを願っている。

「出会いで君は変わる？？　～怒涛の 7 日間を終えて～」
3-B　長崎県立大学　安田実央

怒涛の 7 日間を終えて、今充実感でいっぱいです。そんな中で、応募した時に提出した作文を見返してみました。応募した理由として、私は主に２つを挙げていました。１つ目に中国のことを知るために日本国内に溢れている情報をそのまま鵜呑みにするのではな く、自ら肌で感じることで正しい理解をしたいと思ったからです。挑戦しないまま、毛嫌いし食わず嫌いをする人間にはなりたくないと思っていました。２つ目に、参加することで「百聞は一見に如かず」のように自分で体験することが何よりの学びとなり、自分という人間を構成する上で欠かせないピースになると考えたからです。結果として、私にとって大きな変化をもたらしてくれた 7 日間になったことは間違いありません。訪中団に参加して感じたことが主に 3 つあります。

１つ目に、訪中団についてです。私は九州から参加したのですが、圧倒的に関東の大学の方が多くて、とても不安でした。しかし、参加してみると B 班のみんなが元気で暖かく接してくれて、以前から友人だったかのように会話することができました。話をする中で、お互いに意見交換をする瞬間もありました。例えば、バスの移動中にも、ある風景から「日本とは違って同じデザインの建物が多く建てられているね。」と話す場面がありました。私は、班の子のどんな瞬間でも学ぼうとする意欲と思考の柔軟さに感動すると同時に面白い着眼点だなと感じました。各都道府県から集まっていることもあって、違う感性を持つ人達が集まっているからこそ起きる科学反応のようなものが多くありました。私たちの世代はコロナ禍で思うように全国の大学生と交流する機会が圧倒的に少なかったと思います。今回、日中友好大学生訪中団を通して同世代と活動することができて、私自身も周りに影響されて柔軟な思考で互いを高め合いつつ、ポジティブな気持ちで過ごすことができ成長を感じました。

２つ目に、中国についてです。私は今回 2 回目の訪中でした。以前は西安を訪れてお り、訪中する前は正直「また西安か」と思っていました。ですが、訪中してみて思ったのは、2 回だけじゃ中国という国を理解するのには全然足りないということです。

北京、西安、上海を今回訪れましたが、全く違う雰囲気がありました。北京では、万里の長城、景山公園に行き、歴史の重みを感じながらも大都市ならではの貫禄を感じられました。西安は、昨年 1 ヶ月間留学をしていた時に出会った西安外国語大学の学生との再会がありました。大学での交流会では、1 人 1 人にペアの子がついてくださったこともあり、お互いの国の大学生活や就職活動の違いについて、より深く意見交換ができました。上海での滞在時間は予定よりかなり短くなってしまいましたが、クルーズ船に乗って上海の街並みを堪能し、どこか西欧や日本の雰囲気を彷彿させる建物の多さに驚きました。他にも、個人的に地元である長崎県の企業が近年上海と関わり深いこともあって、より親近感をもって楽しむことができました。それぞれの都市に違った特徴がありましたが、今回関わってくださ

った中国の方々に言えることはただ一つです。それは、皆さん非常に友好的で自国に誇りを持っているということです。もちろん、すべての中国人が一様に友好的であるとは言い切れません。しかしながら、友好的で親切な対応をしてくださる方も多く存在していることを私たちはもっと多くの日本人に伝えなければならないと強く思います。人の考えというのはそう簡単には変わらない、それでも伝え続けることをやめなければ小さな変化をもたらすことができると信じたいです。さらに、中国の人々は自分の国の歴史や偉人のことなど詳しく知っており、自らの国に誇りを持っていることを肌で感じました。日本人は、日本の歴史や偉人について正しい情報を伝えられる人がどのくらいいるのだろうかと私達の自国愛の低さを認識させられました。一方で、海外に訪れてみてわかる日本の良さも感じとることができて、中国へのリスペクトはもちろんのこと、自国の良さも再確認しました。大学 4 年にこのような貴重な体験ができたことに感謝し、これからも様々な人と出会い大きく成長していきたいです。

「中国を五感で感じ、改めて中国という国、人を好きになった７日間」
3-B　筑波大学　渡邊真都

私自身、中国を訪れる前は、昨今の福島第一原発の処理水問題などに代表される中国の外交問題などもあり、国としての中国に対するイメージはあまり良いものではなかった。そのせいか、人に対するイメージもそれほど良いものではなかった。しかし、この訪中を終え、自分の五感で中国という土地に足を踏み入れ、人と接する機会を持った。この７日間を終えて、心から持った感想は、上記の題名とした「中国を五感で感じ、中国という国、人を好きになった７日間」だったということである。初めての中国旅行で訪れた北京、上海、西安。それぞれの都市が持つ独特の魅力に触れ、私は中国の過去と未来が交差する瞬間を目の当たりにした。北京では、景山公園からの壮麗な建築群に圧倒され、万里の長城の雄大さに息を呑んだ。共産党歴史博物館を訪れて中国の歴史の重みを感じながら、行き交う人々の活気に満ちた様子に、現代中国のエネルギーを感じた。街中を歩くなかで、そこで暮らす人々の笑顔に触れ、古き良き中国の温かさに触れることができた。西安では、兵馬俑の迫力に圧倒され、古代中国の技術力の高さに驚嘆した。西安城壁を歩きながら、悠久の歴史に思いを馳せ、大雁塔からの景色を眺めながら、中国の仏教文化の深さに触れた。餃子などの本場の西安料理を堪能し、改めて中国料理の繊細さと味の力強さを感じた。そして、最後に訪れた上海は、まさに刺激的な都市だった。外灘の美しい夜景に魅了され、ここで将来的に海外駐在として活躍できる人材に成長したいとさえ感じた。今回の旅を通して、私は中国の多様性と奥深さを実感した。北京の荘厳な歴史、上海の近代的なエネルギー、西安の悠久の歴史。それぞれの都市が持つ魅力は、私たち学生の感性を魅了し、忘れられない思い出を与えてくれたことは間違いなく事実である。この旅で得た経験は、私にとってかけがえのない財産となった。中国の過去と未来が交差する瞬間を目の当たりにし、私は、中国という国への興味をさらに深めることができたからである。そして最後に、北京外国語大学・西安外国語大学で学生と交流できたことは、この訪中のなかでも特に私の印象に残っていることだ。今までは、留学先で中国人の留学生と会話する機会を僅かに経験した。しかし、長い時間、彼らが勉強している環境の中で語り合う時間はなかった。北京外国語大学での、学生との就職活動や日本・中国のアニメに関するディスカッションをした経験。北京の伝統的な豆花というドリンクを飲んでみた経験。西安外国語大学で、ペアの学生にキャンパスツアーをしていただいた経験。どれも、同じ年代の中国の人と、同じ視点で日中交流ができたことは、まさに私自信にとってかけがえのない経験となった。この経験をしたからこそ、私たちのような次の世代を担う年齢の人が、これからも中国の人と“心からの”交流をしていくことが重要であると思う。